こどもの事故

●こどもの事故について

現在の日本に於いて１歳以上の小児の死因の第1位は不慮の事故です。しかも、他の先進国と比較してもわが国の乳幼児の事故による死亡率は高く、何らかの対策が必要です。

事故死の原因は、交通事故が53.4%、溺死が11.9%、窒息が10.0%、他に誤飲、誤嚥（ごえん）、中毒、熱傷、転落などさまざまですが、小児の死因は年齢によって大きく異なります。

年少で多い事故の原因は溺水（特に浴槽）と転落です。我が国では年間300～400人の小児が溺水で死亡しています。溺死事故全体の40%強が家庭の浴槽で起こっており、0～1歳代では90%以上が浴槽での溺水です。年長になると圧倒的に交通事故が多くなります。

『後悔、先に立たず』の諺どおり、起こってからでは遅いのです。こどもは、自分から、身を守る方法を見つけることが出来ません。親が代わりに、見つけるのは当然であり、義務と考えましょう。下記のサイトを参考に家庭内にこどもの事故を防ぐ工夫を取り入れましょう。

ただし、起こってしまった事故を親の責任として片付けてしまうことは最もよくありません。こどもの事故を欧米並みに減らすためには、こどもの安全を守る社会全体のシステム作りが不可欠です。

○ 子どもに安全をプレゼント「事故防止支援サイト」
http://www.niph.go.jp/soshiki/shogai/jikoboshi/index.html

○ 子供の安全ネットワーク・ジャパン
http://safekids.ne.jp/

事故の予防

「救命の連鎖」という言葉があります。成人の場合命にかかわる状態になった場合、まず第一に行うことは救急の通報です。しかし、小児の場合その死亡原因の違いから「救命の連鎖」の第一段階は予防になります。まず、命を危険にさらさないための対策が重要なのです。

溺　水の対策

- 浴室の鍵をこどもの手の届かない高さにつける。
- 3歳以下のこどもがいる家庭では入浴後は浴槽の水を抜き、残し湯をしない。
- こどもだけでの入浴をしない。
- 浴槽用椅子型浮き輪を使用しない。どうしても使用したければ一瞬でも目を離さない。
- 浴槽の縁の高さが50cmあれば、ほとんどの浴槽内への転落を防げる。

転倒・転落の対策

- 危険な場所に行かせない。
- 鍵をかける習慣。
- 鍵の位置をかえて、こどもの力では開かないようにする。
- ベビーベッドの柵を上げておく。
- 柵のない台やいすの上に寝かせない。
- 窓の下に家具やソファーを置かない。
- 足場になるようなものをベランダに置かない。

交通事故の対策

- 助手席に乗せない。
- チャイルドシートを使用する。
- チャイルドシートは正しく設置、着用する。
  （１歳未満は後ろ向き45度）
- ドアロック、ウインドウロックを確実に。
- 自転車に乗る時はヘルメットを着用する。

窒息・気道異物の対策

- 食事はゆっくり少しずつ与える。
- 食後はしばらくの間静かに過ごす。おむつ交換は時間をおいて行う。
- 遊びながら食べたり、食べながら走らせたりしない。
- ナッツ類は学童期になるまで与えない。
- 小物は床面から１メートル以上の高さにおく。
- 乳幼児が口に食べ物を充満したまま転んだり、 異物を口に入れるのを見たときに、大人が大声をあげるとかえって泣き出し、気管内に誤嚥したりすることがある。

頭を打った！

次のような症状が見られますか？

- □ 完全に意識の無い状態が続く。
- □ けいれんが止まらない。
- □ 大量の出血がある。
- □ 頭蓋骨が陥没している。

はい

救急車を呼びましょう！

次のような症状が見られますか？

- □ 直後に一過性の意識消失があり、すぐ泣かなかった。
- □ ぼんやりしてきて、ほおっておくと眠ってしまう。
- □ 強い頭痛を訴える。
- □ けいれんが起きた。
- □ 吐き気が続く。嘔吐を繰り返す。
- □ 左右の瞳の大きさが違う。
- □ 手足が動きにくい。手足の動きに左右差がある。手足がしびれる。
- □ 物が二重に見える。物が見えにくい。
- □ 耳や鼻から出血がある。
- □ 頭を打った前後のことを覚えていない。
- □ なんとなく普段とくらべて様子が違う。

はい

上記の症状が1つでもある時は
すぐに医療機関を受診しましょう。
出血があれば清潔なタオルなどを当て、
圧迫しながら医療機関を受診しましょう。

ホームケアのポイント

- ●頭を強く打っても、頭の骨に骨折がなく、目や手足の動きや意識に異常がなければ、あわてずに、平日の昼間などを待って受診しても、たいていは心配ありません。
- ●直後は無症状でも、徐々に症状が出てくることがあるので48時間はおとなしくすごして、様子を見てください。
- ●1～2日間は入浴を避けてください。
- ●1週間程度は普段と変わった様子が無いか、注意して観察しましょう。

のどにつまらせた！ 窒息

食事中や物を口に入れているときに、突然の咳き込み、ゼーゼー、目を白黒させるなどの症状が出たときは喉に詰まらせた可能性があります。
以下のような処置をしましょう。

背部叩打法

乳児：片腕の上にうつぶせにして手で顔を支え、頭を低くする。
小児：うつぶせにしたお子さんの腹部を自分のひざに乗せるようにかかえるか、前屈姿勢にして胸に手を当てる。

上記の姿勢をとらせて、背部の真ん中～上背部を手のひらまたは手の付け根で数回強くたたく。異物が取れて楽になるか、反応がなくなるまで続けてください。
すぐに異物が取れず苦しそうな時、顔色が悪い時は、背部叩打を続けながら救急車を呼んでください。
反応や呼吸が無くなったら心肺蘇生を始めてください。

誤飲

まず、**何をどのくらい**の量飲んだのか
落ち着いて確認しましょう。

\すぐに/ 救急車を呼んだほうが良い場合

・意識が無い。けいれんが止まらない。
　呼吸がおかしい。
・塩酸、苛性ソーダ、除草剤、パラコート、有機リン系殺虫剤、トイレ洗浄剤、業務用漂白剤などの誤飲

\すぐに/ 医療機関を受診したほうがよい場合

・顔色が悪い。
・嘔気、嘔吐がある。
・けいれんを起こした。
・飲み込んだ直後に激しく咳き込んだ。

※受診の際には飲んだものの容器、説明書、嘔吐物などを持っていきましょう。

すぐに 吐かせたほうがよい 場合

タバコ（2cm以上食べた、食べた量がわからない、または灰皿の水を飲んだ）、ホウ酸団子、ナフタリン、パラジクロルベンゼン、医薬品、芳香剤、消臭剤、洗剤の誤飲

すぐに 吐かせてはいけない 場合

・6ヶ月未満の乳児。
・意識障害、けいれんがあるとき。
・重症の心臓病や不整脈があるとき。
・揮発性のもの、酸・アルカリ、固形物（特に尖った物）を誤飲したとき。
　ボタン電池、硬貨、灯油、シンナー、ベンジン、除光液、漂白剤など

何もせず様子を見て大丈夫な場合

・顔色もよく、吐気も無く、息苦しさも無い。
・少量のタバコ（2cm未満）、ビニール製品、硬貨、紙製品、消しゴム、鉛筆の芯、チョーク、絵の具、クレヨン、粘土、ろうそく、線香、蚊取り線香、口紅、クレンザー、シリカゲル、入浴剤、練り歯磨き、糊の誤飲

対応がわからないときの相談窓口（日本中毒相談センター）

●**中毒110番**（情報料：無料）
【大　阪】**072-727-2499**（365日／24時間）
【つくば】**029-852-9999**（365日／9時～21時）

●**タバコ専用電話**
（情報料：無料、テープによる一般市民向け情報提供）
072-726-9922（365日／24時間）

HOME ホームケアのポイント

●口の中を覗いて物が見えたら、押し込まないように注意しながら指でかき出しましょう。
　喉の奥を指で探ってはいけません。
●誤飲した場合の共通の処置
　・液状のものは、皮膚や目についてないかを調べ、付いていれば流水で15分以上洗いましょう。
　・多量の水を飲ませることは、吐かせるための前処置として行う以外は止めましょう。
　　かえって毒物を溶かしたり吸収をうながしたりしてしまします。
●強酸や強アルカリなどの腐食性物質を誤飲した場合の処置
　・絶対に吐かせてはいけません。
　・すぐに多量の牛乳を飲ませましょう。
　・必ず病院へ行って診察を受けましょう。
●次の物質は脂溶性なので牛乳を飲ませてはいけません。
　農薬、殺鼠剤、殺虫剤、防虫剤

やけどした！

\すぐに/ 医療機関を受診したほうがよい場合

・熱傷の程度が軽くみえても広範囲の熱傷。（大人の手のひらより広い範囲）
・範囲に関わらず、熱傷部分が白、もしくは黒くなっている。
・痛みが強い。水ぶくれができている。
・顔面、関節部分や手のひらなどの熱傷。
（皮膚の引きつれがおこり動かしにくくなる可能性がありますので、早めに受診しておきましょう）
・熱傷の重症度判断はきわめて難しいので、判断がつかない場合は病院を受診しましょう。

HOME ホームケアのポイント

●まずしっかり冷やしましょう
・流水（水道水）や氷などを利用して、最低20～30分間以上冷やしましょう。
（市販されている冷却シートは、やけどには使えませんので注意してください）
・服を着たままの熱傷の場合、服を脱がせづらければ服の上から冷やします。
●熱傷面積が手のひらより狭く、水ぶくれがないときは、救急受診の必要はありません。
よく冷やしてあげて、診療時間内に受診しましょう。
●やけどのときしない方がいいこと
・民間療法は極力しないようにしましょう。（アロエや油をぬる、など）
・熱傷部位にさわらず、水疱を破らないようにしましょう。
●使い捨てカイロや、ぬるい湯たんぽでも、長時間あたると低温やけどになることがあるので注意が必要です。